

### 『アルポミシュ』と幸若舞曲『百合若大臣』 ：影響関係をめぐる一試論

KHALMIRZAEVA, Saida / ハルミルザエヴァ, サイダ

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国際日本学研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

INTERNATIONAL JAPANESE STUDIES / 国際日本学

(巻 / Volume)

12

(開始ページ / Start Page)

53

(終了ページ / End Page)

73

(発行年 / Year)

2015-01-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00022481>

# 『アルポミシュ』と幸若舞曲『百合若大臣』 —影響関係をめぐる一試論—

サイダ・ハルミルザエヴァ

## はじめに

主人公が遠征に出かけたまま行方不明になってしまう。その妻が夫の留守の間、権力のある人物から求婚を受け、強引に結婚を迫られる。外見が誰にも分からないほど変わってしまった主人公が帰国し、正体を明かさないうちに、暫くの間彼の留守中に起こった変化を見守る。やがて弓を引く試合が行われ、主人公は正体を隠したまま試合に参加し、彼の象徴である弓を引く。皆その場で主人公が帰っていることが分かる。

このストーリーを聞いた途端、日本人は誰もが日本の有名な伝承である『百合若大臣』を思い浮かべるだろう。しかし、以上に取り上げたものは、『百合若大臣』の伝承ではなく、中央アジアの英雄叙事詩の一つ『アルポミシュ』の後半部の要旨である。

中央アジアと日本は遠く離れており、現在では文化上の共通点が見られない国であるためか、今日まで中央アジアと日本の文学を内容上比較しようとする試みは特にされていない。だが、両国は古代からシルクロードのような文化ルートにより繋がっている時期があり、日本の文化・文学形成の基盤となった仏教も現在中央アジアが位置する地を含む中央アジアを経て日本に伝わってきたことは事実である。このようなことを考えれば、中央アジアと日本の口承文学・書承文学の間に何らかの形で交流があったことも一概に否定できないのではないかと。中央アジアと日本の口承文学・書承文学を比較する研究がなされていないのは、両国の文学・文化の間に繋がりが無いからではなく、

おそらく中央アジアの文学はまだ世界で一般的に知られていないからではないだろうか。

中央アジアと日本の語り物の比較研究をしている間に、中央アジアと日本の文学に思った以上内容が似ているものがあることに気付いた。『アルポミシュ』と『百合若大臣』の伝承もその一つの例である。

『アルポミシュ』<sup>(1)</sup>『百合若大臣』はそれぞれ個別に、『オデュッセイア』<sup>(2)</sup>と内容が似ていることが指摘されたことがある。それぞれの伝承におけるモチーフが共通することが、これまで行われてきた比較研究の出発点になっていた。確かに、『アルポミシュ』『百合若大臣』はともに『オデュッセイア』と同様に、「遠征に出かけたまま長年帰国しない夫」が「妻が窮地に追い込まれている」時期に「外見が誰にも分からないまま家に帰り」、「特別な弓を引くことで正体を明かす」というモチーフを中心に展開されている。三つの伝承の間にはこのような共通点が見られることは偶然なのだろうか。

本稿では、共通モチーフを中心に『オデュッセイア』『アルポミシュ』『百合若大臣』の影響関係の可能性について考察していく。

## I. 『オデュッセイア』と『アルポミシュ』の影響関係の可能性

まず、『オデュッセイア』と『アルポミシュ』の関係について見ていく。

(1) 『アルポミシュ』は今日でも中央アジアに口頭伝承として生き残っている語り物の一つである。『アルポミシュ』は中央アジアだけでなく、カザフスタンやタジキスタンでも語られた伝承である。『アルポミシュ』はかねてから口頭で伝えられ、19世紀末からその詞章がロシアの学者により記録されるようになった。現在、数人の語り手から収録された『アルポミシュ』（演唱バージョン）が出版されており、一般的に読み物として嗜まれている。しかし、今日でも語り手がその内容を口頭伝承の形で伝えている地域がある。ほとんどの『アルポミシュ』のバージョン（記録された詞章と口頭で伝わる伝承）は同じ構成・内容を持つが、その構成の枠組みの中で流動が見られる。本稿では取り上げた『アルポミシュ』は1928年にフォジル・ヨルドシュ・オグリという語り手から記録され、1939年に出版された詞章である。このバージョンは今日まで記録されたものの中で一番完成度が高く、内容が豊富なものであるとされている。

(2) 『オデュッセイア』の成立に関しては様々な説があるが、本稿では、一般的に認められている説に従っている。『オデュッセイア』はヨーロッパ最古の英雄叙事詩であり、紀元前8世紀末において古代ギリシアで活動していた語り手ホメロスの作とされる。それ以前に口頭伝承として存在した『オデュッセイア』が紀元前6世紀から文字によって記録された。

『アルポミシュ』の成立事情は未詳であるが、伝承の発祥地に関しては二つの説がある。旧ソ連の文学研究者ジルムンスキ・ビクトル (Zhirmunsky, Victor) によれば、『アルポミシュ』は11世紀以前に中央アジアに住んでいたチュルコ語系部族の間に生まれた伝承であるという。さらに、ジルムンスキはもう一つの起源説を提唱している。この説によると、『アルポミシュ』の発生地は中央アジアではなく、6世紀から8世紀までの間チュルコ語系部族の住地であったアルタイ<sup>(3)</sup>とのことである。『アルポミシュ』と類似した伝承がアルタイにも確認されたことがこの説の拠り所であったが、ジルムンスキ自身は、逆に中央アジアで生まれた伝承がアルタイの方へ伝播していった可能性もあり得ると認めている。

また、伝承の発生時期に関しては、遅くとも11世紀初期までに発生したと考えられる。『アルポミシュ』と内容が酷似している『バムシ・ベイレク』(Bamsi Beyrek) は『コルクドの本』(Dede Korkut)<sup>(4)</sup> という伝承集成に収められている。この『コルクドの本』は9世紀から14世紀までの間チュルコ語系部族の間に広まっていた口頭伝承を集めたものである。『バムシ・ベイレク』のように中央アジアの伝承と内容が共通しているものは、11世紀から12世紀の間(セルジューク朝の時代)中央アジアから西の方へ移住したチュルコ語系部族オウズによって中央アジアから小アジアや外カフカスへ伝播していったとされる(Бартольд 1930; Жирмунский, Зарифов 1947; Жирмунский 1960; Жирмунский 1962)。

ジルムンスキは『アルポミシュ』の起源をチュルコ語系部族の伝承に求めているが、同時に彼自身が『アルポミシュ』には『オデュッセイア』と共通するモチーフが多いことを指摘している。確かに、『オデュッセイア』と『アルポミシュ』の内容を比較してみると、両伝承において「夫が窮地に追い込まれている妻を救う」「変装した主人公が弓を引くことで正体を明かす」というモチーフを確認できる。両伝承は「主人公が帰国する」までの部分においては相違点が多いが、後半部の「主人公が捕虜となっていた場所から解放されて帰国する」

(3) 西シベリア南部にある地方。

(4) 現存する『コルクドの本』は16世紀の写本であるが、15世紀において纏められた集成であるとされる。最初の写本はドレスデン王立図書館所蔵のものであり、もう一つの写本はバチカン図書館所蔵のものである。

ところから「弓を引くことで正体を明かす」までの部分は細部まで類似性が見られる。ジルムンスキは両伝承における共通モチーフの存在を次のように説明している。

『オデュッセイア』とアルポミシュの伝承における共通点は、両伝承に所々細部まで内容が一致していても、直接的な影響関係により生じたものとは考えがたい。アルポミシュの伝承が成立の初期段階に『オデュッセイア』から影響を受けたとは考えられない。このような影響の可能性を歴史的に説明できない。おそらく、この二つの口頭伝承は、多くの民族の間で伝わっていたより古いモチーフを基にしているだろう（Жирмунский 1974: 317）。

つまり、ジルムンスキによると、もともと存在した「夫が窮地に追い込まれている妻を救う」「変装した主人公が弓を引くことで正体を明かす」のようなモチーフをもとに、古代ギリシアと中央アジアにおいて個別に『オデュッセイア』と『アルポミシュ』のような伝承が生まれたという。このジルムンスキの説は今日でも旧ソ連の諸国では有力視されている。しかし、彼の説には一つ納得がゆかないところがある。それは、ジルムンスキが伝承の影響関係を「歴史的に説明できない」として、ギリシア文化と中央アジア文化の間に直接的な繋がりがあった事実を完全に無視していることである。

中央アジアは、非常に長い様々な出来事に富んだ歴史を持つ。当地域は、紀元前4世紀にアレクサンドロス大王に侵略された後に、グレコ・バクトリア王国の一部となっていた時期もあった。この時代にこそ、この地域は多大なギリシア文化の影響を受けることとなったが、ギリシア文化との交流はそれ以降も絶えることはなかった。例えば、ガンダーラ美術がギリシア文化と大陸内アジア文化との混合により生まれたことはよく知られている。ギリシア文化が中央アジアに伝播していたことを証明する物理的証拠が現在でも確認できる。その多くは考古学的証拠であるが、少数ながら、文学に関わりがあるものもある。例えば、『イソップ物語』をもとに、8世紀から12世紀の間に作成されたソグド語、パルティア語、古チュルコ語で書かれた物語の断片が存在する。これらの断片は中国のウイグル自治区にあるトルファンに発見さ

れたものである。また、タジキスタンのパンジケントにおいて同じく『イソップ物語』を題材とした、7－8世紀のものとされる壁画が残っている（Henning 1945; Compareti 2012）。

『オデュッセイア』のような伝承も、それらと同じ経路によってギリシア文化と中央アジア文化の間に積極的な交流があった時代に当地域に伝播し、口頭で伝わっていく過程で変貌を遂げていった可能性があるのではないか。

## Ⅱ. 『オデュッセイア』『アルポミシュ』『百合若大臣』における相違点と共通点

次に、『アルポミシュ』と『百合若大臣』の類似性について見ていく。

日本の『百合若大臣』という伝承は研究史が長い。その成立には坪内逍遙の『オデュッセイア』翻案説や津田左右吉の国内発生説など、様々な仮説が立てられ、『百合若大臣』と共通モチーフを持つものとして、インドの『マハーバーラタ』や中国の『白兔記』など、多くの伝承が紹介されてきた。その中で『アルポミシュ』も『百合若大臣』と共通モチーフを持つ伝承として、大林太良と福田晃に取り上げられたことがある（大林 1977; 福田 1989）。大林も福田も『百合若大臣』の起源に関する詳細な考察を行っているが、『アルポミシュ』については、類話の一つとして取り上げるに止まっている。

筆者は、『百合若大臣』のもととなった伝承の発祥地は中央アジアにこそあると提言し、『百合若大臣』は中央アジアの『アルポミシュ』を通じてギリシアの『オデュッセイア』と繋がっていることを提唱する。この説を裏付けるために、『オデュッセイア』『アルポミシュ』『百合若大臣』の比較を行う。

『アルポミシュ』の内容を次のように纏められる。

ボイボリとボイサリという兄弟の権力者がいた。二人とも子供に恵まれなかったが、神秘的な力の協力により、ボイボリには息子ホキムとボイサリには娘バルチンオイが生まれた。そして、ボイボリとボイサリは子供同士を婚約させた。ホキムは大力の者だったので、後にアルポミシュと呼ばれるようになった。ある日、ボイサリは家族を連れ、遠いコロモ

クの国に移動してしまった。そこで、バルチンオイはコルモク人に求婚を迫られ、アルポミシュに手紙を送って助けを求めた。アルポミシュはコルモクの国に向かった。そこで、コルモク人との戦いに打ち勝ち、バルチンオイを母国へ連れて帰った。母国に帰った二人は結婚し、幸せに暮らし始めたが、アルポミシュは叔父ボイサリを助けるために、再びコルモクの国に向かった。そこで、コルモク人との戦いに打ち勝ったが、戦い後、あるコルモク人の老女にお酒を飲まされ、熟睡してしまった。熟睡しているアルポミシュはコルモク人に深い穴の中に落とされ、そこで7年間暮らすこととなった。ある日、穴の中に鷺鳥が落ちてきた。アルポミシュは鷺鳥を通じて家族に手紙を送った。7年後、ある姫の協力により解放されたアルポミシュは母国に帰った。そこで、アルポミシュの異母兄弟ウルトントズが、アルポミシュの留守を利用して権力を篡奪し、アルポミシュの妻を自分と結婚させようとしていた。アルポミシュがコルモクの国に出発した後生まれたアルポミシュの息子ヨドゴルをはじめ、アルポミシュの家族はウルトントズに虐げられていた。アルポミシュは家に帰る途中、忠実な家来と出会い、自分の体にある印を示すことより、家来に正体を明かした。しかし、家来以外誰にも正体を明かさなかった。家来の協力により老人に変装して家に帰ったアルポミシュは、正体を明かさないうま弓を引く試合に参加した。試合ではアルポミシュは彼以外誰にも引けない自分の特別な弓を引いた。その場で皆アルポミシュが帰っていることが分かった。そして、アルポミシュは篡奪者を処罰し、家族と一緒にめでたく暮らし始めた。

『アルポミシュ』と『百合若大臣』を比較してみると、両伝承は「主人公の誕生」「第一の遠征からの帰国と妻・恋人との再会」「第二の遠征への出発と熟睡中の騙まし討ち」「主人公の孤独な生活」「文使いの鳥」「外見が変化した主人公の帰国」「弓の試合」というモチーフが見られ、モチーフはストーリー展開においてほぼ同じ順番に配列されていることが分かる。『百合若大臣』に比べ、『アルポミシュ』は全体のストーリーが長く、内容がより複雑・豊富であるが、大まかに見れば、『アルポミシュ』と『百合若大臣』は似たような構

成を持つと言える。『アルポミシュ』と『百合若大臣』はともに「両親が権力者であるが、後継ぎがない」というエピソードから始まり、「主人公が一度勝利を収め、遠征から帰国する」ものの、「二度目の遠征に出た時騙されて一人で孤独なところに残される」というように展開されている。また、「孤独に生活している主人公が鳥を通じて親戚に自分の無事を知らせる」というモチーフも両伝承において確認できる。『アルポミシュ』と『百合若大臣』の後半部の展開に関しても、細部に相違点が見られるが、二つの伝承の展開は似ている。中央アジアの『アルポミシュ』と『百合若大臣』に共通モチーフがあることは偶然なのだろうか。

『オデュッセイア』『アルポミシュ』『百合若大臣』の共通モチーフを比較対照し、次の表で示した。

モチーフ	『オデュッセイア』	『アルポミシュ』	『百合若大臣』
主人公は後継ぎのいない権力者のもとに、神秘的な力の協力により生まれる	×	○	○
主人公が遠征に出かける	○	○	○
主人公が第一の遠征から帰国し、暫く妻・恋人と一緒に暮らす	×	○	○
主人公が第二の遠征に出かける	×	○	○
主人公が熟睡中、一人で孤独なところに残される	×	○	○
主人公の妻は夫の留守中結婚を迫られる	○	○	○
求婚者・篡奪者は主人公の身近な者	×	○	○
文使いの鳥	×	○	○
主人公の外見が変化する	○	○	○
主人公の家来	○	○	○
主人公の体にある印	○	○	×
ある動物が主人の帰国を感知する	○	○	×
主人公の息子	○	○	×
主人公が正体を明かさなまま妻と話し、妻の忠実さを確認する	○	○	×
弓を引く試合、主人公の特別な弓	○	○	○
主人公が求婚者・篡奪者を処罰し、権力を取り戻す	○	○	○



以上の表を見ても『オデュッセイア』『アルポミシュ』『百合若大臣』は共通モチーフが見られるが、『アルポミシュ』と『百合若大臣』の方には『オデュッセイア』が共有しない共通点が多いことが分かる。また、『オデュッセイア』と『アルポミシュ』は『百合若大臣』にはないモチーフを共有していることも明らかである。

以下、『オデュッセイア』『アルポミシュ』『百合若大臣』の相違点と共通点について見ていく。

## 1. 伝承の始まり—主人公の誕生

『百合若大臣』のストーリーは、主人公が観音の申し子として生まれることから始まる。

抑むかし我朝に、嵯峨の帝の御時、左大臣きんみつと申て並びなき臣下一人おはします。しかれ共、きんみつに御代を継ぐべき御子なし。かくてはいかゞ有るべきと、大和の国初瀬の寺に詣でて、悲願尽きせぬ観音の利生を仰ぎ、三十三度の歩みを運び、申し子をこそ給ひけれ。今に初めぬ観音の、願ひの潮もはや満ちて、程なく御子をまうけ給ふ。しかも男子にて御座ある（麻原 1994: 43）。

『百合若大臣』と同じく、『アルポミシュ』も「後継ぎのいない権力者のもとに、神秘的な力の協力により子供が生まれる」というモチーフが見られる。主人公アルポミシュの誕生に関する部分は、次のように纏められる。

昔コングロドという部族のアルピンビイという支配者には二人の息子がいた。長男の名はボイボリ、次男の名はボイサリであった。ボイサリは一万棟もあるボイスン族の族長であり、長男のボイボリはコングロド地全体の君主であった。しかし、兄弟二人とも子どもがいなかった。ある日、兄弟の夢の中で聖人が登場し、近いうちにボイサリとボイボリに子供が生まれると予言した。確かに、兄弟の妻たちは間もなく子を身ごもり、9か月間経つと、ボイボリには息子と娘、ボイサリには娘が生まれた。子

供たちの誕生祝いに夢の中で現れた聖人が来た。彼はボイボリの息子にホキム、娘にカルディルゴチという名を付け、ボイサリの娘にバルチンオイという名を与えた。また、ボイボリの息子とボイサリの娘を婚約させた。

「主人公の誕生」から始まる『アルポミシュ』『百合若大臣』と違い、『オデュッセイア』は「主人公が捕虜となっていた島から解放され、母国へ向かった」エピソードから始まり、長々と続く主人公の冒険譚へとストーリーが展開されていく。

## 2. 主人公の遠征

『百合若大臣』では一度遠征から帰った主人公が筑紫の国司となり、最愛の妻と一緒に豊後国府に暮し始める。ある日公卿僉議が行われ、戦いで勝利の仕方が認められず、主人公は再び遠征に出かける。

大臣殿は（中略）御台所を引き具して、急ぎ筑紫に下り、豊後の国府に京をたて、さながら都に劣らず住ませ給ふ。又都には、公卿僉議まちへたり。「蒙古が大將は四人と聞こふるを、せめて一人討取てこそ戦に勝ちたるしはあるべけれ。九夷は二相の者なれば、何とか思ふて引つらん。心の内も悟りがたし。先高麗国へうち越え、七百六十六国をせめ従へ、其大勢を率し、百済国を攻め靡け、其後む国を攻めん事、何の子細の有べき」と僉議して、筑紫へ勢をぞ越されける。大臣殿も吉日を選び、御出でとこそ聞こえけれ（麻原 1994: 47）。

『アルポミシュ』の主人公も、百合若大臣と同じく二度遠征に出ることとなっている。アルポミシュは一度コルモクの国で勝利を収め、恋人と一緒に帰国するが、叔父を助けようと再びコルモクの国へ向かう。アルポミシュの遠征に関する部分を次のように纏められる。

主人公の父ボイボリと叔父ボイサリが喧嘩し、叔父が家族を連れてコル

モクの国に移動した。叔父の娘バルチンオイは主人公アルポミシュ（幼名はホキム）の恋人であった。バルチンオイは美人だったので、コルモクの国では多くのコルモク人から求婚を受けた。コルモク人に決意を迫られたバルチンオイは助けを求め、恋人のアルポミシュに手紙を送った。手紙を受けたアルポミシュはコルモクの国へ向かった。そこで試合と戦いに勝ち、バルチンオイを母国へ連れて帰った。アルポミシュとバルチンオイは結婚して幸せに暮らしはじめた。ある時、コルモクの国に残り、コルモク人から侮辱を受けたボイサリから手紙が届いた。ボイサリは手紙に自分の置かれている状況について述べていた。手紙を読んだバルチンオイは父を助けるためにアルポミシュを再びコルモクの国へ送った。

「一度遠征から無事に戻ってくるが、もう一度遠征に出かける」『百合若大臣』『アルポミシュ』の主人公と違い、オデュッセウスはトロイ戦争に出かけたまま20年間も帰国できず、トロイから帰る途中様々な冒険を体験する。

### 3. 主人公が帰国しない理由

主人公がなかなか帰国しない理由に関しては、海神ポセイドンの怒りを買ったため、長年様々な冒険を経験しながら漂泊していたオデュッセウスと違い、『百合若大臣』と『アルポミシュ』は「主人公が熟睡してしまい、孤独なところに残されたため帰国できなかった」という共通性が見られる。しかし、「主人公が熟睡してしまい、なかなか起きない」理由と「生きたまま孤独なところに残された」理由は、それぞれの伝承において異なる。『百合若大臣』では、主人公が「大力の癖やらん、寝入て左右なく起きさせたまはず、夜日三日ぞまどろみ給ふ」（麻原 1994: 50）となっている。それに対し、アルポミシュが熟睡してしまった理由は、スルハイル老女がアルポミシュのお酒に入れた催眠剤である。アルポミシュが催眠剤を飲んで一人で孤独なところで残されるまでの経緯を次のように纏められる。

スルハイル老女はアルポミシュと彼の40人の兵を自分の家に誘った。スルハイル老女の家では40人の美女がアルポミシュと彼の兵をもてなし、

催眠剤の入ったお酒を飲ませた。スルハイル老女は寝込んでしまった兵を焚き火で燃やし殺してしまった。アルポミシュだけが燃えなかった。コルモク人がスルハイル老女の家を訪れ、熟睡しているアルポミシュを刀で切り、矢で射殺そうとしたが、アルポミシュは特別な存在だったので、傷一つ負わなかった。結局、コルモク人が離れた場所に深い穴を掘り、こんな孤独な場所に残せば、いつか死んでしまうだろうと、アルポミシュを穴の中に落とした。そして、アルポミシュは7年間も穴の中で生活することとなった。

つまり、アルポミシュが生き残ったのは、彼が生まれながら特別な存在だったからである。このような『アルポミシュ』の非現実的な説明に対し、『百合若大臣』では「主人公が生き残ったのは、別府兄弟の弟の方が殺さずに一人で残そうと、兄を説得したので、熟睡している百合若大臣を生きのまま孤島に残して行ったから」と、より合理的な説明が見られる。

#### 4. 主人公の妻への求婚

『オデュッセイア』『アルポミシュ』『百合若大臣』三つの伝承において「主人公の妻が強引に結婚を迫られる」モチーフがある。『オデュッセイア』では、イタケーの多くの貴族たちが主人公の妻ペネロペイアに求婚し、結婚相手の選択を迫る。このモチーフに関しては、『アルポミシュ』と『百合若大臣』において「妻が強引に結婚を迫られる」以外に、「主人公の留守を利用して権力者となった求婚者は主人公の身近な者である」という共通点が見られる。『アルポミシュ』では、主人公がコルモク人の捕虜となっている間に、彼の異母兄弟であるウルトントズが権力を篡奪し、アルポミシュの親戚を苦しませ、その妻を自分と結婚させようとする。『百合若大臣』では、日本に帰ってきた別府兄弟は百合若大臣の代わりに筑紫の国司となり、「天下一の美人」だった百合若大臣の妻を自分と結婚させようとする。

#### 5. 文使いの鳥

『アルポミシュ』と『百合若大臣』の双方には、『オデュッセイア』には見ら

れない「孤独に生活している主人公が文使いの鳥を通じて親戚に生きていることを知らせる」というモチーフが見られる。『百合若大臣』では、鳥は主人公が飼っていた緑丸という鷹であり、ある日主人公がいる孤島に飛んでくるとい設定になっている。緑丸は主人公の無事を知らせる手紙を妻に届けるが、孤島へ帰る途中、その足に結ばれた物の重さに堪えられず海に落ちて死んでしまう。それに対し、『アルポミシュ』では、鳥は突然現れ、主人公の手紙を彼の親戚に届けた後にストーリー上から消えてしまう。『アルポミシュ』の文使いの鳥に関する部分を次のように纏められる。

ある日深い穴の中に捕虜となっていたアルポミシュは、鷺鳥が穴の上の空を飛び回っているのに気付いた。鷺鳥は穴の中に落ちてきた。鷺鳥の翼は矢に射抜かれており、足が折れていた。アルポミシュは鷺鳥の傷を癒した後に、鷺鳥を通じて親戚に手紙を送った。鷺鳥は手紙をアルポミシュの妹に届けた。妹はアルポミシュの友人コラジョンにアルポミシュを救いに行かせた。コラジョンはアルポミシュが捕虜となっていた穴を見つけ出し、友人を救おうとしたが、アルポミシュは救われたくないと断った。

## 6. 主人公の家来

『オデュッセイア』『アルポミシュ』『百合若大臣』三つの伝承において「主人公が帰国後、昔から主人公に仕えていた忠実な家来の世話になる」というモチーフが見られる。『オデュッセイア』『アルポミシュ』には『百合若大臣』が共有しない「帰国した主人公が家来に体にある印を示し、自分が帰っていることを証明する」という共通点がある。『オデュッセイア』では、「体にある印」は主人公が狩りで負った傷であり、「体にある印により正体を明かす」モチーフが二度見られる。主人公の足を洗う乳母がその傷で主人が帰っていることが分かる時と、主人公がこの印を別の家来に見せ、自分が帰っていることを証明する時である。『アルポミシュ』では、主人公の体には幼い頃から聖人の恩恵として残った印がある。オデュッセウスと同じく、アルポミシュは「体にある印」を家来に見せ、自分が帰っていることを証明する。『百合若大臣』では主人公が「年頃大臣に召し仕へし」家来に預けられるエピソードがあるが、「主

人公の体にある印により正体を明かす」ことに関しては言及されていない。

## 7. 主人公の息子

オデュッセウスとアルポミシュはともに故郷に妻と息子が残っている。オデュッセウスの場合、主人公が20年も留守にしたので、帰国する時に、息子は大人になっている。それに対し、『アルポミシュ』の場合、主人公が帰国する時、息子は7歳である。『オデュッセイア』では、息子テレマコス構成上大事な部分を占めている。伝承自体はテレマコスが父の消息を探し、父とトロイ戦争で戦った仲間たちのもとを訪れたことから始まり、テレマコスの旅は複数の歌にかけて詳細に述べられている。また、主人公の帰国後も、テレマコスは父の復讐計画に参加し、伝承の最後まで主人公の一人として活躍する。それに対し、『アルポミシュ』では、息子ヨドゴルは主人公の帰国後登場する。ヨドゴルはテレマコスと違い、幼い子供であるが、伝承の最後に誰も取り上げられない主人公の弓を地から引っ張り出す役割を任せられている。『オデュッセイア』『アルポミシュ』の主人公と違い、百合若大臣には子供がいらないという設定になっている。

## 8. 主人公の外見の変化

『オデュッセイア』『アルポミシュ』『百合若大臣』三つの伝承において「主人公は外見が誰にも分からないほど変わった状態で家に帰る」というモチーフが見られる。「主人公の外見が変化する」ことに関しては、神アテナによって外見が変化させられたオデュッセウスと違い、アルポミシュは変装して帰ろうと、家来と服装を代え、家畜の皮を利用して外見を誰にも分からないほど変化させたとなっている。『百合若大臣』では、主人公の外見が誰にも分からないほど変化しているのは、彼が長年状況の厳しい孤独な島に生活していたからと、「主人公の外見の変化」というモチーフの合理化が窺われる。長年の旅から帰ってきたにもかかわらず、実際の外見がもとのままに美しいオデュッセウスとアルポミシュと違い、百合若大臣は「御顔にも御足手にも、さながら苔のむし給ひ、御背も小さく色も黒く」（麻原 1994: 64）といったみすばらしい格好で帰国する。

## 9. 主人公の特別な弓

三つの伝承において「特別な弓」が主人公の象徴であり、ストーリー上重要な役割を果たす。不思議なことに、『アルポミシュ』でも『オデュッセイア』でも、主人公が彼の象徴である弓を家に残したまま遠征に出かけているという設定になっている。『アルポミシュ』ではその理由が説明されていないが、『オデュッセイア』においては主人公が弓を大事にしていたため、遠い遠征に持っていくことはなく、常に家に残して出かけていたとなっている。

ゼウスの子が、この弓の贈り主エウリュトスが一子で、その姿神にも見紛うイピトスを殺したからであるが、この弓を勇士オデュッセウスは、黒き船で戦いに臨む時には、携えたことはかつてなく、親愛なる友の記念として常に屋敷の中に置き、国許にある時にのみこれを手にした（松平 1994: 230）。

『百合若大臣』では弓が主人公の帰り先にあったことに関しては、「主人公が寝ている間に、別府兄弟が彼の弓を持って帰った」と、より合理的な説明が見られる。また、この説明も「これは不思議の事どもかな。敵と組ませ給はんに、いつのひまに御形見を止めて、海に入り給ふべきぞや。前後不覚の事を申ものかな」（麻原 1994: 53）と疑問視され、「弓」に関するモチーフの合理的な再認識の跡が窺われる。

## 10. 伝承の終わりー弓の試合

「主人公が弓の試合で彼の象徴である特別な弓を引いて正体を明かす」モチーフは、『オデュッセイア』『アルポミシュ』『百合若大臣』三つの伝承において共通している。だが、最初から主人公オデュッセウスの弓を引く試合として設定された『オデュッセイア』と違い、『アルポミシュ』と『百合若大臣』は、全ての弓が主人公の力に耐えられず壊れてしまったので、彼の特別な弓が運ばれてきたという共通点が見られる。『アルポミシュ』の「弓の試合」に関する部分を次のように纏められる。

ウルトントズとバルチンオイの結婚祝いに弓を引く試合が行われた。老人になり切ったアルポミシュが弓を引こうとすると、どの弓も彼の力に堪えず、壊れてしまった。アルポミシュは正体を明かさないうまま自分の弓を持ってくるように頼んだ。その特別な弓を引くことで皆アルポミシュが帰ってきたことが分かった。

三つの伝承とも、同じく「主人公が彼の留守を利用して権力者となり、妻を苦しめている者に復讐をする。そして、権力者の立場を取り戻し、めでたく家族と一緒に暮らす」ことで結ばれている。

以上のモチーフの比較から、『オデュッセイア』『アルポミシュ』『百合若大臣』に関して次のことが言える。

『オデュッセイア』『アルポミシュ』『百合若大臣』は内容上の共通点がある。しかし、『オデュッセイア』と『百合若大臣』を比べてみると、「主人公が帰国する」までの部分においては相違が多いことが分かる。例えば、主人公が孤島から放されるエピソードから始まり、長々と続く主人公の冒険譚に入っていく『オデュッセイア』と違い、『百合若大臣』は「主人公の誕生」から始まり、「主人公が二度の遠征を経て孤独なところにおかれた」という展開になっている。それに対し、『百合若大臣』を『アルポミシュ』と比べてみると、「主人公の誕生」「第一の遠征からの帰国と妻・恋人との再会」「第二の遠征への出発と熟睡中の騙まし討ち」「主人公の孤独な生活」「文使いの鳥」「外見が変化した主人公の帰国」「弓の試合」のように、両伝承を構成するモチーフは、順を追ってほぼ同じ展開になっていることが分かる。また、『アルポミシュ』と『百合若大臣』には『オデュッセイア』にはない「主人公の誕生」「文使いの鳥」のようなモチーフがある。しかし、同時に、『オデュッセイア』と『アルポミシュ』には、例えば、「主人公の息子」や「主人公が正体を明かさないうまま妻と話し、妻の忠実さを確認する」のような『百合若大臣』にはない共通点がある。

要するに、『アルポミシュ』は『オデュッセイア』とも『百合若大臣』とも共通する部分があり、明らかに『オデュッセイア』と『百合若大臣』双方の特徴を併せ持つ伝承なのである。

「夫が窮地に追い込まれている最愛の妻を救う」「夫が妻の結婚日に長い旅か



ら帰る」「試合が行われ、主人公が誰よりも上手く弓を引く」などのモチーフは、『オデュッセイア』『アルポミシュ』『百合若大臣』だけに見られるわけではない。しかし、その内『オデュッセイア』『アルポミシュ』『百合若大臣』は「外見が変化した夫が帰り、弓を引く試合に参加」し、「窮地に追い込まれている最愛の妻を救う」というモチーフ以外のところで共通性がある。三つの伝承の中でも、中央アジアの『アルポミシュ』が『オデュッセイア』と『百合若大臣』が相違する部分においても、それぞれの伝承との類似性が見られる。

### Ⅲ. 『百合若大臣』と『アルポミシュ』の影響関係の可能性

最後に、『オデュッセイア』『アルポミシュ』『百合若大臣』の影響関係の可能性について考察する。

「主人公が身近な者に裏切られる」「変装した主人公が自分の妻の結婚日に長い旅から帰る」「帰国した主人公が誰よりも上手く弓を引く」といったモチーフを持つ伝承は世界中に確認できる。西洋では、これらの伝承はソゾノビチ・イヴァン (Sozonovich, Ivan)、ポタニン・ゲオルギイ (Potanin, Georgiy)、トルストイ・イヴァン (Tolstoy, Ivan)、ジルムンスキのような研究者たちに収集・分析され、西洋と東洋の多くの伝承が紹介されてきた。だが、ジルムンスキは、確認された伝承の中でも「詳細部まで共通点が見られる」ものは、『オデュッセイア』と『アルポミシュ』だと指摘している (Жирмунский 1960; Жирмунский 1979)。

日本でも『オデュッセイア』は『百合若大臣』と共通モチーフを持つ伝承として注目されたが、『百合若大臣』の長い研究史の中でインドから日本までの中間の地域の多くの伝承が『百合若大臣』と共通モチーフを持つものとして紹介された。中でも「裏切られた主人公が帰国する」「裏切り者は主人公の妻を自分と結婚させようとする」「主人公が上手に弓を引く」という点で特に共通性が見られるものはネパールのマガル族の神話、中央アジアの『アルポミシュ』、中国の「凱剛と凱諾の物語」、「兄と弟」、「マゼBUM」といった伝承である。しかし、その内特に『アルポミシュ』は『百合若大臣』と共通モチーフが多く、共通モチーフの数のみならず、伝承全体の構成、いわゆるプロットも著しく似

ていることが興味深い。例えば、『アルポミシュ』と『百合若大臣』が共有する「主人公が跡継ぎのいない両親のもとに神秘的な力の協力により生まれる」「主人公が熟睡中一人で残される」「鳥をもって家族と文を交わす」「主人公の忠実な家来」などのモチーフはマガル族の神話にも「凱剛と凱諾の物語」「マゼBUM」のような中国の神話にも確認できない。

ロシアの研究者ベセロフスキ・アレクサンドル (Veselovskiy, Alexander) は『詩学史』において普遍心性説・伝播説・民族学説といった三つのカテゴリを取り上げ、伝承型を比較研究する際、モチーフとプロット (伝承全体の構成) という二つの概念を区別して考えるべきだと述べている。そして、ベセロフスキはモチーフとプロットを次のように定義している。

モチーフとは原始思考や日常的な観察の中から生まれた疑問への答えとして誕生した、物語の最小単位である。(中略)プロットとは様々なモチーフの組み合わせにより構成されたものである。(中略)プロットにおけるモチーフの組み合わせが不合理で複雑でプロットを構成するモチーフが多いほど、異なる種族の類話は人間共通の世界観や生活を基に精神的な自己発生のプロセスの結果生まれたとは考え難い。単なるモチーフが世界各地に自己発生した可能性はあるが、モチーフの組み合わせであるプロットは似ていることは伝播の可能性を暗示する (Веселовский 1940: 500)。

『アルポミシュ』と『百合若大臣』の場合、共通モチーフのみならず、それらのモチーフの組み合わせで構成されるプロットまで似ていることは、両伝承の間に何らかの形で繋がりがあったことを示唆するのではないか。

筆者は『百合若大臣』と『オデュッセイア』の間に繋がりがあることを認めながらも、両伝承は直接ではなく、中央アジアの『アルポミシュ』を通じて関連していると考え。『アルポミシュ』の起源に関して言えば、中央アジアは古代ギリシアの文化と直接の交流があった地域なので、古代ギリシアの伝承が当地域まで伝わっていたと想定できる。『オデュッセイア』のような伝承が中央アジアに流布し、現地の伝承と混合することにより、「主人公が変装して帰り、窮地に追い込まれている妻を救う」「主人公が特別な弓を引くことで

正体を明かす」など、『オデュッセイア』のモチーフを取り入れた伝承が生まれた可能性がある。また、中央アジアの伝承も大陸内交易・文化ルートによりさらに東に広がり、結局日本に辿りつき、『百合若大臣』のような伝承のもととなった可能性も想定できる。現段階では、中央アジアと日本の中間の地域において『アルポミシュ』と『百合若大臣』ほど共通モチーフが多い伝承は確認されていないので、『アルポミシュ』のような伝承はいつどの経路で中央アジアから日本へ伝わってきたかを特定することは難しい。しかし、明らかに『アルポミシュ』と『百合若大臣』は諸点において共通点が見られるもので、これほど似たような展開を持つ伝承はそれぞれ個別に中央アジアと日本において生まれたとは考えがたい。『アルポミシュ』と『百合若大臣』との類似性は偶然発生したのではなく、両伝承の影響関係の結果生じた可能性が極めて高い。それゆえ、『百合若大臣』の起源を求める際、中央アジアの伝承を取り入れた、より広い比較研究を行う必要がある。

## おわりに

今後、モチーフが『アルポミシュ』と『百合若大臣』と共通する伝承を収集・分析し、『アルポミシュ』や『百合若大臣』は本稿で取り上げた以外の形でも存在する伝承なので、伝承バージョンの比較研究を続けていく。

本研究の成果は、日本の『百合若大臣』という伝承の起源に示唆を与えるだけでなく、古くから存在した中央アジアと日本との文化交流を示す例となり、研究者たちが中央アジア文学に目を向けるきっかけともなることを期待している。

## 引用文献・参考文献

1. Ўзбек халқ ижоди. Қўп томлик. Алпомиш: Достон.-Т., Адабиёт ва санъат нашриёти, 1979.
2. Бартольд В.В. Турецкий эпос и Кавказ. Сб. «Язык и культура», т. V, Л., 1930.
3. Веселовский А.Н. Историческая поэтика. Л., 1940. (『詩学史』)
4. Жирмунский В.М., Зарифов Х.Т. Узбекский народный героический эпос. М., 1947.
5. Жирмунский В. М. Сказание об Алпамыше и богатырская сказка, М., 1960.
6. Жирмунский В.М. Народный героический эпос. М.-Л., 1962.

7. Жирмунский В.М. Тюркский героический эпос. Л., 1974.
8. Жирмунский В.М. Сравнительное литературоведение. Л., 1979.
9. Потанин Г. Н. Казак – киргизские и алтайские предания, легенды и сказки. Живая старина, 1916, вып. 2-3, с. 95-97.
10. Созонович И.П. Къ вопросу о западномъ влияніи на славянскую и русскую поэзію. Изслѣдование И. Созоновича, профессора Императорскаго Варшавскаго Университета. – Варшава: Типографія Варшавскаго Учебнаго Округа, 1898.
11. Толстой И.И. «Возвращение мужа» в «Одиссее» и в русской сказке. – В кн.: Сергеев Фёдоровичу Ольденбургу. К пятидесятилетию научно-общественной деятельности. 1882-1932. Л., 1934.
12. Книга моего деда Коркута. Под ред. А.П. Конаков. Л., 1962.
13. Araki, T. James. “Yuriwaka and Ulysses. The Homeric Epics at the Court of Ouchi Yoshitaka.” *Monumenta Nipponica* 33(1): 1-36. Sophia University, 1978.
14. Compareti, Matteo. “Classical Elements in Sogdian Art: Aesop’s Fables Represented in The Mural Paintings at Panjikent.” *Iranica Antiqua* 47: 303-316. Gent University, 2012.
15. Henning, Walter Bruno. “Sogdian Tales.” *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 11(3): 465-487. University of London, 1945.
16. Hibbard, Esther Lowell. “The Ulysses Motif in Japanese Literature.” *The Journal of American Folklore* 59 (233): 221-246. American Folklore Society, 1946.
17. Riddle, Mark A. “Japan and Inner Asia: Some Connections.” *Sino-platonic Papers* 209: 1-23. University of Pennsylvania, 2011.
18. 麻原美子、北原保雄校注 1994 『舞の本』 東京：岩波書店
19. 大林太良 1977 「百合若伝説と内陸アジア」『フォクロア』1：78-81 東京：民俗の思想を考える会
20. 大林太良 1986 『神話の系譜—日本神話の源流をさぐる』 東京：青土社
21. 金関丈夫 1982 『木馬と石牛』 東京：岩波書店
22. 金賛會 2002 「伝承説話からみる日本と韓国のかかわり—百合若説話を中心に—」『ポリグロシア』5：69-83 大分：立命館アジア太平洋大学言語教育センター
23. 金賛會 2011 「百合若大臣伝説と韓国の民間伝承」『古代朝鮮文化を考える』26：1-24 大分：大分県の中の古代朝鮮文化を考える会
24. 後藤匡史 2006 「伝説百合若大臣」『古代朝鮮文化を考える』21：149-158 大分：大分県の中の古代朝鮮文化を考える会
25. 津田左右吉 1953 『文学に現はれたる国民思想の研究』 東京：岩波書店
26. 服部幸造 2003 「英雄の物語—幸若舞曲「百合若大臣」を中心に—」『国文学』48/11：88-93 東京：學燈社
27. 福田晃 1989 「中世の神話的伝承—「甲賀三郎」「百合若大臣」をめぐって—」『日本民間伝承の源流—日本基礎文化の探求』40-87 東京：小学館
28. 前田淑 1959 「幸若舞曲「百合若大臣」と報恩経—百合若文学成立に関する—試論—」『文学・語学』12：94-100 東京：三省堂
29. 松平千秋訳 1994 『オデュッセイア』 東京：岩波書店
30. 山口麻太郎 1977 「百合若伝説の系譜」『フォクロア』1：45-53 東京：民俗の思想を考える会

&lt;ABSTRACT&gt;

## ALPOMISH AND YURIWAKA DAIJIN: ON THE POSSIBILITY OF THE STORY TRANSMISSION

Saida KHALMIRZAEVA

*Alpomish*, a narrative known in Central Asia from the 11<sup>th</sup> century AD at the latest, and the medieval Japanese narrative *Yuriwaka Daijin*, mostly known as one of the texts in the repertory of the *kōwakamai*, not only share remarkable motif similarities, but also demonstrate a parallel in the sequence in which the motifs occur. In both *Alpomish* and *Yuriwaka Daijin* the hero, who leaves his land to fight an enemy, returns home after years of seclusion only to find his family being harassed by traitors. The hero's appearance has changed beyond recognition, which is why no one, even his loyal servant, can recognize him. For a time the hero observes what has occurred during his absence, finally revealing his identity by stringing his distinctive bow, punishing the traitors and reuniting with his family.

Even though the similarity of motifs in *Alpomish* and *Yuriwaka Daijin* has been pointed out by such famous Japanese scholars as Ōbayashi Taryō and Fukuda Akira, a thorough comparative research aimed at establishing possible connections between the two stories has never been undertaken, possibly due to lack of available information on Central Asian narratives.

The aim of this paper is to explore possible connections between *Alpomish* and *Yuriwaka Daijin* based on principles of the transmission theory. In the paper a thorough comparative analysis of motifs and story structures of *Alpomish* and *Yuriwaka Daijin* will be accomplished in order to demonstrate similarities and differences and to establish the relationship between the two stories.

This paper might not only shed light on the origins of *Yuriwaka Daijin*, but also contribute to better understanding of the history of cultural exchange between Central Asia and Japan in the past.